



冬に向けて子牛の疾病対策を始めましょう

【はじめに】

10月に入り、朝夕の時間帯はぐっと冷え込むようになってきました。

肉用牛は比較的寒さには強いですが、子牛は成牛に比べて、体重当たりの表面積が大きく熱を奪われやすいこと、体脂肪が少ないこと、第1胃が未発達のため体内で発生する発酵熱が少ないこと等の理由で体温を維持することが難しく、寒冷対策が重要です。

哺育期の下痢や呼吸器病への罹患は発育遅延につながり、経営に大きなダメージとなるので、十分な対策をとって予防しましょう。

【気を付けるポイント】

(1) すき風対策・定期的な換気

隙間風は、子牛にとって大敵です。板やビニールシート等を活用して、風が子牛に直接当たらないようにしましょう。また、牛舎内にハッチを設置したり、天井を低くしたりすることで子牛を飼養する空間を狭くし、熱を逃がさないようにすることも効果があります。ただし、換気を怠ると、アンモニアガスやほこりによる呼吸器病を誘発するため、暖かい時間帯に効率よく換気しましょう。

詳しくは岩手県肉用牛飼養衛生管理マニュアルをご参照ください

(2) 乾燥した敷料

冷たく濡れた床や敷料は、子牛の体温を奪い下痢の原因になります。清潔で乾いた寝床を常に維持するために、寝床を中心に敷料はたっぷりと敷き、交換は早めに行いましょう。

(3) カーフジャケット等による保温

牛にカーフジャケット等を着せることも効果的です。

(4) ワクチンによる免疫強化

農場でよくみられる牛の下痢・呼吸器病としては、下痢ではコクシジウム、牛ロタウイルス病が多く1年を通して子牛で多発し、牛コロナウイルス、大腸菌、クリプトスポリジウムなどとの混合感染により、症状を悪化させる事例が散見しています。呼吸器病では主に、牛RSウイルス病や牛コロナウイルス病が寒冷期11～4月に集中して発生しています。飼養環境の改善に加えて、呼吸器病ワクチンの接種を検討する場合は、ワクチンの特徴(下表)を踏まえる他、BVD対策も考慮して管理獣医師と相談し、適切なプログラムで接種しましょう。



各地域の家畜衛生協議会が扱う牛の呼吸器病ワクチン(一部抜粋)

	生ワクチン	不活化ワクチン
種類	5種混合生ワクチン、カーフウィン6	ボビバックB5、キャトルウィン6
長所	1回接種で有効、免疫持続期間長い	妊娠牛に使用可能、移行抗体の影響少ない
短所	妊娠牛に使用不可、移行抗体で失活	初年度は2回接種、免疫持続期間短い

